
ダレモシラナイコクハク

改樹考果

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダレモシラナイコクハク

【Nコード】

N5802F

【作者名】

改樹考果

【あらすじ】

毎夜毎夜繰り返し返される告白。それは誰も知らない告白。それは誰も知ってはいけない告白。……でも、その告白が、知られてしまったら……

(前書き)

某アニメの某シーンを見ていて思い付いた話です。

前回投稿した『コクハクノアサレン』とは全く毛色が違いますので、そちらを見た事がある方は『ご注意を』

彼女

「好き。好き。好き……あなたが好き」

静かな寝息を立てている彼の傍で、私は何度も告白した。

「大好き。大好き……あなたが大好き」

彼は一度寝ると、例えば地震が起きても絶対に起きない。だから、彼の唇に唇を重ねても、

気付かれない。

「大好き」

もう一度唇を重ねて、私は彼の部屋から出た。

告白した時の胸の高鳴りと、

重ねた唇の感触を、

何度も何度も反芻しながら、

『誰も知らない告白』

を何度も何度も反芻しながら、

私は涙を流した。

この告白は、誰も知らない告白『じゃなくちゃいけない』。だって私達は、

彼

彼女が部屋から出て行く気配を感じ、俺は『寝たふり』をするのを止めた。

月明かりに照らされた部屋を見る。

ついさっきまでいた彼女の残り香を感じて、俺は、

「好きだよ」

自然と涙が流れた。

「俺も好きだよ」

彼女が重ねた唇に手を当て、彼女の感触を思い出す。

「大好きだよ」

溢れ出す感情から、俺は流れる涙を止める事が出来ない。
毎夜毎夜続く彼女の告白。

『誰も知らない告白』

でなければいけない彼女の告白。
胸を締め付けられる。

「…………でも、ごめん…………ごめん」

唇に当てていた手で、目を隠す。

「応えられない」

応える事が出来ない。

「だってそうだろ？俺達は…………」

彼女と彼

『兄妹』なんだから…………」

彼女

「おはようお母さん」

「あら？今日も早いよね…………部活でも始めたの？」

「…………うん」

嘘。これは嘘。

本当は部活になんか入ってない。

「何部に入ったの？」

「…………テニス部」

「じゃあ、ラケットとか買ったの？」

「部の予備を使わせて貰ってるから大丈夫…………もう行くね」

「いつてらっしやい」

嘘に嘘を重ねた。

…………でも、心は苦しくない。

だって、いつ彼が、兄が起きてくるか、私は不安で不安で仕方が
なかったから…………。

毎夜毎夜。兄が寝ている隙に行う誰も知らない告白。
そんな告白を繰り返し返す私は、起きている兄の前で……妹でいられ
る自信は……ない。

だから、誰も知らない告白をし始めてから、私は兄が起きてくる
前に学校に行っている。

誰も知らない告白を……兄が知ったら……そう思つと……『怖
かった』。

彼

彼女が、妹が家を出る気配を感じて……俺は部屋から出た。

「おはよう母さん」

「おはよ……最近、くまが酷いわよ。ちゃんと寝てる？」

「寝てるよ」

「そう？……何をしているか知らないけど、無理しちゃ駄目よ？」

「わかってるよ」

無理はしてない。

無理はしてないけど……限界は来ている。

体調が……ではなく……俺の心が……。

いつ、妹が誰も知らない告白を始めたのかは……分からない。

妹の告白を知ったのは、偶然だった。

……少々見られては困る事をしていて……いつもより遅くまで起きて
いた。

そして、寝るか寝ないかの頃に……妹が入って来た。

最近は互いの時間が合わない為か、滅多に顔を合わさず、会話も
交わしていなかった妹がノックもせずに入って来た事に、疑問には
思ったが、眠気が勝り、目を閉じていた。

……そして、

「好き」

誰も知らない告白でなければいけない告白を聞いてしまった。

心臓が跳ね上がり……歓喜と絶望の感情に心がかきむしられた。

何故なら、俺も妹の事が、

好きだったから……。

好きだから、

歡喜した。

妹だから、

絶望した。

そんな感情を抱いてはいけなれないと思い、知り、ずっと心の奥底に閉じ込めていた感情が……一気に溢れ出す。

もしここで俺が起きている事が妹に知られたら……どうなるか……怖かった。

どうなっても、俺にとっては最悪の結末にしかならない。

勿論、妹にとっても……そうなる。

例え、妹が望んでいても……。

だから、俺は寝たふりをした。

妹は俺の寝たふりに気付かず、何度も何度も告白し……その日は部屋を出てってくれた。

どうするか、どうしようか、悩んでも答えが出ず。

次の日も、その次の日も、妹は告白に訪れ、俺は寝たふりをするしかなかった。

そうやって手をこまねいているうちに……妹の告白は、部屋の入口で、ベットの近くで、ベットに腰を掛けて、頭をなでながら、つと徐々にエスカレーターしていき……終には……昨日……

「どうしたの？唇なんか抑えて？」

母の言葉に、俺は自分が唇を抑えている事に気付いた。

……限界だった。

これ以上、妹の告白を聞き続ければ……妹の告白は、誰も知らない告白では『なくなってしまう』。

そう思った俺は……

「母さん……話がある」

彼女

「うそ!？」

その話をお母さんから聞いて、私は持っていた鞆を床に落とした。「嘘じゃないわよ?お兄ちゃん。一人暮らしをするんだって…なんか。前から準備だけはしてたみたい。全く、親の私にも相談なしに勝手に家を出てくなんて…やっぱり、お兄ちゃんも男の子って事なのかしら?…ああ?どうしたの?顔色が悪いわよ?」

「…ちよつと…調子が悪いから…ご飯まで部屋で寝てるね」
私はそう言つて、自分の部屋に戻つた。

部屋に戻つた私は…布団にくるまつて、あふれ出来る感情を抑えきれず、泣いた。

ヤダ!ヤダ!ヤダ!ヤダ!!

お兄ちゃん!お兄ちゃん!お兄ちゃん!!

嫌だよ。お兄ちゃんがないなんて、いなくなるなんて…嫌だ!

彼

家を出ると両親に話したその日、俺は家に帰らなかった。

親には家を出る準備の為に、友人の家に泊めて貰うつて言つてあるが…実際は、妹が俺が家を出るつて聞いて…暴走しないかを警戒して帰らなかった。

次の日、俺は妹が学校に行つている間に家に帰り、荷物を纏め、妹が返つてくる前に家を出た。

次の日も、その次の日も…そして、俺は妹に会わないまま…一人暮らしを始めた。

…これで、

妹の、

彼女の、

誰も知らない告白は、

…誰も知らないまま…

そう思っていた。

一人暮らしを始めて数ヶ月。

慌ただしい毎日にようやく慣れ、徐々に一人でいる事を満喫し始めた頃。

寝るか寝ないかのギリギリの時間帯に、

不意に来訪を告げるチャイムが鳴った。

睡魔で判断力が鈍っていた俺は、

迂闊にも、

誰が来たか確認せずに、

玄関を開けてしまった。

そこには……

妹がいた。

前に見た時より明らかに顔色が悪い妹は、

今まで見た事が無い笑みを浮かべて、

「お兄ちゃん。あのね

『ダレモシラナイコクハク』終

(後書き)

こう言う系統の話は、時々他の人の作品で見える事は出来ませんが…
…実際に妹がいるからか…正直、よく分かりません。

こう言う気持ちになった事ありませんから仕方がないんでしょうが…
…まあ、なったらなっただで問題ですが…あり得ませんね…
…でも、興味を引かれる話であることには間違いありません。
いわゆる禁断の…と言うのは、少なからず人を引き付けますかね。

この話で、それがうまく表現出来ていたらいいんですが…。

ちなみに、ラストが中途半端になってるのは、わざとですので、
あしからず。

いわゆる。『結末はご想像にお任せします』ってやつです。

…私なりの結末を書いてもいいんですが…それだと、面白さが半減する気がしたので、こう言う形を取りました。

…これを読んだ皆さんは、どう言う結末を想像しますか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5802f/>

ダレモシラナイコクハク

2011年5月2日17時04分発行